

大白牛車御消息

弘安四年 六〇歳

抑そもそも法華經だいびやくごしゃの大白牛車と申すは、我も人も法華經の行者の乗るべき車にて候なり。彼の車をば法華經の譬喩品ねんごと申すに懇ろに説かせ給ひて候。但し彼の御經は羅什らじゅうぞん、存略りゃくの故に委くわしくは説き給はず。天竺の梵品には車の莊かざり物、其の外、聞・信・戒・定・進・捨・慚ざんの七宝しっぽうまで委くわしく説き給ひて候を、日蓮あらあら披見に及び候。先づ此の車と申すは縦廣五百由旬の車にして、金こがねの輪を入れ、銀しろがねの棟むねをあげ、金の繩を以て八方へつり繩をつけ、三十七重のきだはしをば銀を以てみがきたて、八万四千の宝の鈴を車の四面に懸けられたり。三百六十ながれの紅のはた錦の棹幡を玉のさほにかけながし、四万二千のらんかん欄干には四天王の番をつけ、又車の内には六万九千三百八十余体の仏菩薩宝蓮華に坐し給へり。帝釈は諸の眷属を引きつれ給ひて千二百の音楽を奏し、梵王は天蓋てんがいを指し懸け、地神は山河大地を平等に成し給ふ。故に法性ほっしょうの空に自在にとびゆく車をこそ大白牛車とは申すなれ。我より後に来たり給はん人々は、此の車にめされて靈山へ御出で有るべく候。日蓮も同じ車に乗りて御迎ひにまかり向かふべく候。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日 蓮 花 押